

1990 年代後半の DTM におけるデジタルオーディオの受容

谷口文和（京都精華大学）

本発表では、日本独自の音楽実践として成立したデスクトップ・ミュージック（DTM）において、1990 年代後半から 21 世紀初頭にかけて、パソコンでオーディオデータを編集する技術を導入することによって音楽実践がどのように変化していったかを検討する。現在、DTM という語はデジタル・オーディオ・ワークステーション（DAW）のソフトウェアを核とする音楽制作を指して使われる。しかし 1990 年代なかばまでの DTM 環境は MIDI 規格と音源モジュールを用いた「打ち込み」を中心としたものであり、ハードディスク・レコーディングやサンプリング音源といったデジタルオーディオ技術はまだ導入されていなかった。ゆえに、当時の DTM ユーザにとってデジタルオーディオの受容は、それまでに培った音楽実践のあり方を再構築するという側面をもっていた。

DTM ユーザの動向を読み解くための主な資料として、『DTM マガジン』（寺島情報企画、1994 年創刊）を取り上げる。同誌は最新機器の紹介やテクニックの解説だけでなく、ユーザによる投稿作品やその講評を毎号掲載しており、ユーザ同士が相互の音楽的スキルや価値観をめぐる理解を共有するための場にもなっていた。

発表者がすでに論じたように（『ポピュラー音楽研究』第 28 号所収「互換性に耳を澄ます」参照）、デジタルオーディオ導入前の DTM ではメーカーや機種異なる音源モジュール間の互換性を遵守しながら作品を制作することが規範となっていた。創刊当初の『DTM マガジン』誌面でも、その規範がスキルを評価する基準の一つとして機能していた。しかし、互換性のための規格を上回る性能をもつ機種が次々と発売されるにつれて、互換性を遵守することと機種独自の性能にこだわることとの間にジレンマが生じるようになった。

1990 年代後半から次第に誌面で取り上げられたデジタルオーディオ技術は、当初、そのような初期 DTM の限界を拡張するものとして位置づけられた。これに対して MIDI の打ち込みの側ではデジタルオーディオに匹敵する表現を作れることが指標として持ち出されたが、一方でデジタルオーディオは「無理に MIDI を使わない方が良い」という新たな規範をもたらした。結果として、互換性を遵守する MIDI ユーザが切り離されるかたちで、DTM はデジタルオーディオを取り入れたものとして再編された。